

ベトナム中部トゥーボン川流域における サーフィン文化の土器編年試案

—— ゴーマーヴォイ遺跡出土土器の型式分類 ——

鈴木 朋 美

要旨 東南アジア・環南シナ海周辺地域の新石器時代から初期鉄器時代にかけて、甕棺墓が確認される。特に甕棺墓遺跡が集中するベトナム中部では、甕棺墓を伴う物質文化をサーフィン文化と呼称している。現在、サーフィン文化はオーストロネシア語族拡散説の裏付けとして用いられることが多く、甕棺墓に副葬品として伴う他地域との繋がりを示唆する遺物への関心が高い。しかし、サーフィン文化自体の定義が不明瞭であることに加え、起源、発展、衰退といった通時的解釈や、分布圏といった空間的解釈は未だ足踏み状態である。この問題を解決するためには甕棺墓資料の編年を組み、サーフィン文化の変遷について解釈する必要がある。そして、その成果により東南アジアにおける他地域との比較が可能になる。よって本論では、サーフィン文化広域編年作成のスタートとして1遺跡内での型式変化の把握を試み、その結果2型式の存在を確認できた。

はじめに

ベトナム中部から南部にかけて見られる初期鉄器時代の物質文化は、サーフィン (Sa Huỳnh) 文化と呼称されている。サーフィン文化の最大の特徴は、立位に埋置する甕棺と認識されており、甕棺墓の中にインド・中国・東南アジア各地域との強いつながりを示唆する遺物が副葬されるため、高い海洋性を持った文化として注目を集めている。

近年、ベトナムにおける発掘件数の増加に伴い、遺物・遺跡など資料の増加が目覚ましい。しかし、既存の解釈では説明しがたい遺物が増えてきているのも事実である。こうした遺物・遺跡研究の解釈に対する手詰まり感、研究者間でサーフィン文化の分布圏や起源・終焉に関する認識の差異に起因する。この問題を解決するためには、比較研究の基軸となる土器編年を作成し、土器からサーフィン文化の広がりや変化を捉えて時間的・空間的範囲を定義することが有効である。

しかし、ベトナムにおいて層位学的発掘や型式学的研究は未だに一般的な手法ではなく、土器編年作成に当たりコンテキストの欠如などが作業の障害となっている。一方、ベトナム中部クアンナム (Quảng Nam 省) ゴーマーヴォイ (Gò Mả Vôi) 遺跡の甕棺墓資料は、コンテキストが明確であり、資料数も分析に耐えうる量である。筆者はこの資料に着目し、サーフィン文化土器編年作成作業の第一歩となる1遺跡での型式変化をとらえる試みを行った。

1. ベトナムの甕棺葬とサーフィン文化（図1）

1-1. サーフィン文化研究

初期鉄器時代のベトナム中部では、サーフィン文化と呼ばれる文化が設定されている。サー

フィン文化とは、「ベトナム中部の海岸や川沿いに形成された砂丘上に立地する甕棺墓群を最大の特徴とし、それらに「土器、鉄器、準貴石製（瑪瑙、カーネリアン、ネフライト）やガラス製の装身具、青銅器」が副葬されることを特徴とした文化とされている（山形 2007：97-98）。また、「甕棺を指標とする海洋性の高い文化」（グエン・チュ 2010：14）、「活発な海洋交易を担っていた」（今村 1991）と指摘され、チャンパ王国となる初期国家の基盤を担った文化であると見なされている。

サーフィン文化の研究はフランス人によって着手された。20世紀初頭にヴィネ（Vinet）、パルマンティエ（Parmentier）が調査を行い（Parmentier 1924）、サーフィン文化は土器棺を豊富に伴



図1 ベトナムの甕棺墓遺跡

う遺跡として著名になった。また1960年代にはソルハイム (W. Solheim) が東南アジア島嶼部 (フィリピン、ボルネオ) の先史時代の土器との関連を指摘し、改めて知られることとなった (Solheim ed. 1961)。ベトナム戦争終結以降はベトナム人研究者による調査・研究が盛んになった。特に、ビンチャウ (Binh Châu) 遺跡の発掘により、ロンタイン (Long Thành) 段階—ビンチャウ段階という発展段階を持つ先サーフィン文化が認識され、サーフィン文化はそれに続く文化という概念が作られた (Hà Văn Tấn 1983)。また、バウチャム (Bàu Trâm) 遺跡では、先サーフィン文化であるビンチャウ段階から、サーフィン文化の段階への発展が層位的に確認されたという (Vũ Quốc Hiện et al. 1993)。しかし、再調査の結果バウチャム遺跡の最下層の土器をビンチャウ段階とするのは要再検討であるとの見解が出されている (Bùi Chí Hoàng, Yamagata Mariko 2005)。

1-2. サーフィン文化に関する近年の問題点

サーフィン文化に関する最近の問題意識として、空間的・時間的範囲に研究者たちは注目して

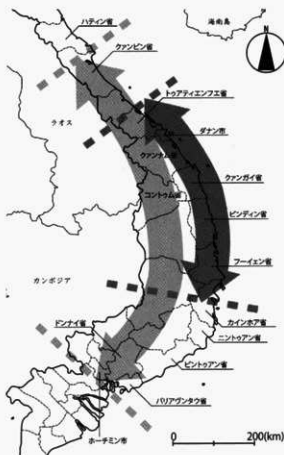


図2 サーフィン文化の分布域
淡灰色：広域案 濃灰色：狭域案

いる。特に、近年では発掘件数が増加し、今までの認識とは異なる副葬品や甕棺が出土している。そのため、新出資料の位置付け、既存の資料の再認識が喫緊の問題になっている。例えば、ゾンカーヴォ (Giồng Cá Vồ) 遺跡・ゾンフエット (Giồng Phết) 遺跡 (南部東域ホーチミン市 Thành Phố Hồ Chí Minh)、フーチュオン (Phù Trưong) 遺跡 (南部東域ビントゥアン Binh Thuan 省)、ホアジェム (Hoà Diêm) 遺跡 (中部南域カインホア Khanh Hoa 省)、バイコイ (Bãi Côi) 遺跡 (中部北域ハティン Hạ Tĩnh 省) などの遺跡からは甕棺墓が検出されているが、甕棺や土器が今までに認識されてきたサーフィン文化の遺物とは形態の面で明らかに異質なものである。このような空間的周縁と言われる地域から出土する遺物の解釈に関しては、隣接する文化との接点の問題となっている。特に銅鼓や青銅器の交換・交易による北部ドンソン (Đông Sơn) 文化との繋がりが注目されている (西村 2012)。

空間的範囲、つまりサーフィン文化の分布圏に関しては広域案と狭域案の2案が挙げられている。広域案とは、現在のベトナム考古学において一般的とされる認識であり、北はクアンビン（Quảng Bình）省、南はホーチミン市までをサーフィン文化分布圏とするものである（グエン・チュ 2010）。一方狭域案は、北はトゥアティエンフエ（Thua Thiên Huế）省フエ（Huế）市から南はカインホア省カムラン湾を分布圏とするものである（山形 2007）。こうした分布圏の差異は、サーフィン文化をどうとらえるか、研究者間の定義の違いから生ずるものである。広域案に関しては、甕棺墓が検出されるか否かを判断基準としており、甕棺の形態、副葬品に関する検討に基づくものではない。一方、狭域案は形態に関して一定の基準を設けており、長胴形もしくは卵形の甕棺の出土する遺跡をサーフィン文化分布圏としている。

時間的範囲に関しては、特にサーフィン文化の甕棺葬の起源と終焉に関する議論が盛んになっている。だが、起源についてはベトナム考古学界と外国人考古学者たちとの間に見解の違いがある。ベトナム考古学界では、石器や土器の文様が先サーフィン・ロンタイン段階のものに類似するという理由から北中部クアンビン省の後期新石器時代のバウチャー（Bàu Tró）文化が起源であると認識されている。しかし現時点でベトナム最古の土器棺はロンタイン遺跡のものである（Chữ Văn Tấn, Đào Linh Côn 1978）。ロンタイン遺跡では金属器が出土しないこともあり、遺跡の年代が新石器時代の末と考えられている（山形 2007）。

ロンタイン遺跡に続き、中部高原のルンレン（Lũng Lũng）遺跡でも新石器時代の甕棺墓が発見された。ルンレン遺跡は、南シナ海に面していない内陸のコントゥム（Kon Tum）省、クロンボコ（Krong Pô Kô）川の北岸に位置する。発掘坑の総面積は15000㎡に及び、205基の甕棺墓、総数229基の墓が検出された。ルンレン遺跡は、放射性炭素年代により紀元前2100年から紀元後100年まで利用された遺跡と報告され、ロンタイン遺跡と並行する時期があったのではと考えられている（Nguyễn Khắc Sứ 2005）。さらに、このルンレン遺跡に表象される中部高原の文化が中部沿岸域の新石器時代の文化と融合してサーフィン文化が誕生したと提唱されている（Nguyễn Khắc Sứ 2005）。このように、ベトナム考古学界では中部における諸文化を包括する形でサーフィン文化が発生したものとし、その起源はベトナム国内にあるという考えが中心である。

一方、オーストロネシア語族拡散説の考古学的検証を試みる外国人研究者らの仮説では、東南アジア各地で甕棺葬が確認されるのはオーストロネシア語族が甕棺葬を行っていたからであり、サーフィン文化の起源はボルネオ島方面に求められるという外来説が有力である（Bellwood, P. 1997）。つまり、サーフィン文化は島嶼部からのオーストロネシア語話者の移動の証拠の一つとして認識されているのである。しかし両者の議論がかみ合うことはない。

終焉については、中部に勃興した初期国家チャンパ（Champa）の出現との関係で注目されているが（Yamagata, M. 2007）甕棺葬自体はチャンパ期にも見られ、それらはサーフィン文化の甕棺として報告されている。おそらくこの見解は「甕棺葬＝サーフィン文化」という認識によるものであろう。こうしてサーフィン文化の終焉からチャンパへの移行の実態が不明瞭になってしまう原

因として、サーフィン文化の遺物・遺構の変遷に関する研究が不十分であることが指摘できよう。

1-3. サーフィン文化の編年研究

前項で述べたとおり、サーフィン文化研究の問題として時間的範囲と空間的範囲の不明確さが挙げられるが、この問題は編年研究によって好転することが期待される。現時点で、最大限にサーフィン文化という物質文化を考えた場合に、甕棺の存在を一つのキーにすることが出発点になる。甕棺墓に関係する遺物の変遷の枠組みを編年により構成してから、サーフィン文化とはどのような物質文化であるのかを考察するべきである。現在、サーフィン文化をめぐる論に関しては、この様な考古学的な基礎研究の手法が欠如している。

しかし、サーフィン文化の編年への取り組みが全く行われていないわけではなく、土器に関する形式分類、型式分類、そして時間差の認識といった研究が行われている。

形式分類に関しては、本論の対象であるゴーマーヴォイ遺跡の報告者の一人であるライネカー (A. Reinecke) が甕棺墓の副葬土器について器形と文様、2つの要素から土器分類を行った (Reinecke et al. 2002)。しかし、彼の分類に対して以下の問題点が挙げられる。表1はその分類であるが、例えば1個体の土器が帯状刻線文と縄席文を持つ場合、両項目でカウントされている事があるため、2つの文様パターンを持つ個体が無視されている点がまず挙げられる。この問題点に関しては石井がすでに指摘している (石井 2012)。また、この分類では各墓における器種や文

表1 ライネカーによるゴーマーヴォイ遺跡の形式分類 (石井 2012より引用、改変)

器種	数量	無文	帯状刻線文	S字文+三角文	貝殻腹線文	彩色(黒/灰色)	彩色(赤)	その他の文様	縄席文
Loại hình đồ gốm	Số	Không có hoa văn	Băng khắc vạch	Chữ S + tam giác	Họa văn in mép vỏ sò	Tô màu đen ánh chì	Tô màu đỏ	Họa văn trang trí khác	Vân thừng
chum 甕棺	18	2	3						15
Nắp 甕棺蓋	19	13				4			2
Nồi 鍋	86	6	42		4	20	1	9	69
Bình 台付鍋	30	2	12	9	1	11	9	6	15
Cốc コップ	3	1	1					1	1
Dền ランプ	2					2	1	2	
Bát 皿・浅鉢	14	4	1		4	6			4
Mâm bông Bát bông 台付皿 台付浅鉢	35	11	7	1	1	14	3	5	1
Loại hình khác その他	3	2		1					
Chân đế 台座	37	16	11	5	1	6	7	3	3
Loại? 不明	5	4				1	1		1
Tổng số 合計	252	61	77	16	11	64	22	26	111

ゴーマーヴォイ遺跡出土土器の器種及び文様分類 (1998-2000年)

様の組み合わせが不明である。一方、グエン・チュ（Nguyễn Chiêu）はサーフィン文化とされる複数の遺跡から出土した土器の形式分類を行った（グエン・チュ 2010）。グエン・チュの形式分類の項目は基本的にライネカーとほぼ同じではあるが、石井が再びその問題点を指摘している。1点目は、ライネカーの型式分類にも共通することであるが、Nôi（甕）とされる器種に明らかに2形式が含まれている点が挙げられる。2点目は、先述の狭域案においてサーフィン文化の分布圏外になるホアジェム遺跡で出土し、他遺跡では現時点で類例がない、フィリピンのカラナイ島出土土器と類似する希少な土器が1形式として挙げられている点が指摘されている。そして、石井はこれらの形式分類案に対して改めて器種分類を行った（石井 2012）。石井は基本的にライネカーの形式分類に則ったが、Nôiに関しては壺と鉢に分類した。さらに、器種の中の型式を見出そうと試み、ゴーマーヴォイ遺跡の中で主体を占める土器の器種と型式を明示した。しかし、墓1基に含まれる器種と型式の組み合わせは墓ごとに明示してあるものの、土器文様に関しては組み合わせを明示していない。したがって遺跡の中での型式変化を見出すまでには至っていないのが問題である。

型式分類に関しては、筆者がベトナム中部における甕棺について行っている（表2）。まず甕棺の形態を5種に大別し、さらに細別を行うという手法で型式的な分類を行った。これにより、

表2 ベトナム中部出土甕棺の形態分類（鈴木 2012を引用・改変）

形態名	広口壺形土器棺			有肩甕棺			有縁深鉢形甕棺	甕形甕棺	長胴形甕棺			不明	各遺跡の甕棺総数	種類
編分形態名	形態1	形態2	形態3	形態4	形態5	形態6	形態7	形態8	形態9	形態10	形態11			
模式図														
遺跡名														
コンラン		9				141		10				52	212	3
ハウサー1	2		1			4			2			1	10	4
アンパン			1							15			16	2
ゴーズア										11			11	1
ビンイェン	1						1			5		2	9	3
ナムミー		2				21			1				24	3
タックビツク								1					1	1
バスア	2	1				1			1				5	4
ゴーマーヴォイ	2		1	11	2	1		4				2	23	6
ティエンライン										2		1	3	1
ソムオック			1										1	1
スオイチン	5		1										6	2
フークオン								1			1	118	120	2
ロンタイン	2				2							16	20	2
ドンクオム			4				46						50	2
ルンレン	1							1				183	185	3
合計(編分)	15	12	9	11	4	168	47	17	4	33	1	375	696	
合計	36			183			47	17	39					

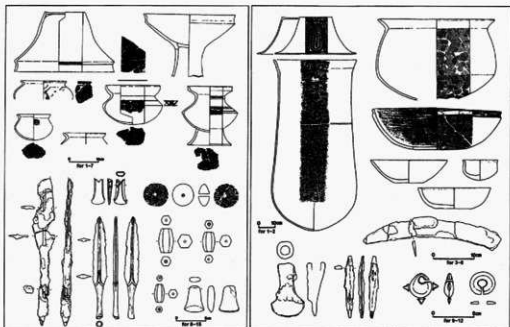


図3 ピンイェン遺跡出土遺物 (Yamagata 2006引用)
1. H1発掘坑M1号墓(左) 2. H2発掘坑M6号墓(右)

I遺跡内で確認される形態の種類に偏向が見られること、形態差の中に地域差が存在することについて指摘できたが、時期差についてはさらなる検討を要した。(鈴木 2012)

そして、サーフィン文化における時間差については、山形が副葬品構成の比較から2段階の存在を指摘している (Yamagata 2006)。ピンイェン遺跡のH1発掘坑とH2発掘坑における墓の副葬品構成を比較し(図3)、青銅器・石器・脚付土器が副葬されるH1発掘坑の墓(図3-1)が古い様相を示すとしてI段階に、そしてH2発掘坑の墓(図3-2)は前者より鉄器が多く脚付土器を持たないことから新しい様相を示すとしてII段階に区分した。この時期区分においてゴーマーヴォイ遺跡の甕棺墓はI段階にあたるという見解を述べている。山形の見解は、サーフィン文化の副葬遺物の変遷に触れており編年の要となりうるものである。

このように、編年に必要とされる研究はすべて独立して行われているため、具体的な編年案を提示するまでに至ってはいない。

1-4. 本論の目標

サーフィン文化において、空間的・時間的範囲の問題はサーフィン文化の定義と深く関わってくる。現状では甕棺墓の有無でサーフィン文化か否かという判断がなされている感が否めない。サーフィン文化について議論するために、中心軸となるような土器編年が必要となる。現時点で筆者は、インドシナ半島・南シナ海沿岸部における甕棺墓の広域編年の完成を目標としている

が、その第一歩として1遺跡内において型式変化が捉えられるか否かを検証する。また、編年作成業のために1遺跡で認識された型式が、甕棺墓遺跡が集中するトゥーボン（Thu Bồn）川流域内において確認されるかについても検討を行う。

2. 分析

2-1. 対象

先行研究でも取り上げられているように、ゴーマーヴォイ遺跡では必要最低限の情報である墓ごとのコンテキストが明らかである。また、遺物の報告状況も良好で、分析に十分耐えうる資料である。よって、本論ではゴーマーヴォイ遺跡を分析対象とする。

ゴーマーヴォイ遺跡は、クアンナム省を流れるトゥーボン川の流域、ズイスエン（Duy Xuyen）県の砂地に位置する甕棺墓地遺跡である（図4）。当該遺跡で発掘は3度行われており、合計で甕棺墓が20基、土壙墓が3基検出された。1998年次（第1回）の発掘調査では、16㎡の発掘坑から甕棺墓3基が検出された。1999年次（第2回）では、合計83.25㎡の発掘坑から甕棺墓11基、

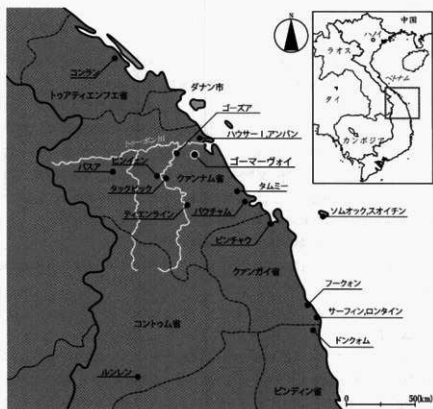


図4 ゴーマーヴォイ遺跡とトゥーボン川流域の甕棺墓遺跡

土壌墓3基が検出された。2000年次(第3回)では、合計59㎡の発掘坑から甕棺墓6基が検出された。しかし、このうち1998年次の資料はコンテキストが不明のため、1999年と2000年のライネカー、ラム・ティ・ミー・ズン(Lâm Thị Mỹ Dung)、グエン・チュによる発掘資料を分析に用いることとする。また、2000年のH2M1号墓から出土した炭化物から紀元前500年~200年の放射性炭素年代が得られている。

報告者によるとこの遺跡の甕棺の大多数は、外反する口縁、くびれた頸部、張り出した肩、卵型の胴部、という形態を呈す(Reinecke et al. 2002)。山形は胴部の特徴から当該遺跡の甕棺を「卵形甕」と称し、肩部の張り出しがなくなると長胴甕の形態に近づくと見なして、甕棺の時間的変遷の可能性を考えている¹⁾。

また、甕棺墓に伴い土器、装飾品、鉄器、青銅器が出土した。装飾品とは、ネフライト製・土製・ガラス製有角球状耳飾(リンリンオー)、ネフライト製球状耳飾、準貴石製・ガラス製・金製ビーズを指す。また当該遺跡の調査以前、サーフィン文化の遺跡で出土する金属器と言えば鉄器が大半を占めていたが、ゴーマヴォイ遺跡は青銅器の総出土点数が鉄器を上回る。鉄器は、斧10点、刀子3点、槍先2点、鑿2点、短剣・鍔など計23点が出土した。一方、青銅器は斧21点、槍先6点、形態不明品2点など29点が出土した。また、銅柄鉄斧も出土した(Reinecke et al. 2002)。

2-2. 分析の方法

ベトナムの甕棺墓遺跡を発掘する際に、土の状態から墓壇の掘り込みを見つけるのが難しく、墓壇ラインを明示している報告が非常に少ない。また、墓壇ラインを見ることができた場合でも切り合う事例が少ない。さらに、資料の状況的に墓1基に属する土器のコンテキストが乱れている遺跡も多々ある。いずれにせよ、サーフィン文化の遺跡において墓壇の切り合いから前後関係を判断することは容易ではない。本論の対象であるゴーマヴォイ遺跡でも、大半の墓の切り合い関係が不明のため層位的に型式編年を組むことが困難である。

この現象の理由として(1)発掘手法の問題、(2)埋納されている土壌の問題、(3)墓地の運用期間の問題、の3点が挙げられる。特に(3)に関しては考察の部分で考えを述べたい。さらに、1つの墓に副葬されている遺物の種類にばらつきがある。筆者は、2012年の2月と8月に未報告・未接合資料の資料調査を行い、ある程度の資料補完はできたものの、副葬品の数量・器種の偏向を補完するには至らなかった。したがって、墓相互での型式比較は困難である。

このような状況下では、ペトリー(W. F. Petrie)のシークエンス・デイティング法(通称SD法)を参考に、資料に見られるであろう型式的差異の認識を行うのが適当である。具体的な手法は以下の通りである。

- ①資料の数量が豊富な一つの墓(A)を基準とし、墓(A)と墓(B)の間で副葬土器の比較を行う。

- ②比較により墓（A）と墓（B）の間で共通する土器を見出す。
 - ③同じ作業を墓（B）と墓（C）、墓（C）と墓（D）という様に繰り返す。
 - ④共通点を辿ることで墓（A）と同型式あるいは近い型式と判断できる全体的なアセンブリッジを把握する。
 - ⑤得られたアセンブリッジを観察し、文様・器形などといった要素をある型式の特徴とする。
- 上記の手順を全ての資料に対して行うことで、1遺跡内における型式分類が可能となる。墓と墓の関係性が希薄な墓群資料を扱う際において、有力な手段であるといえよう。本論では、この手法を用いて1999年次、2000年次の甕棺墓資料を分析する。

2-3. ゴーマーヴォイ遺跡における土器形式

本論では、土器資料を分析対象として扱うが、その前に墓に伴う土器資料の形式についてまとめておきたい。

ベトナムで見られる甕棺墓は基本的に大型の土器を棺体とし、それに土製の蓋をかぶせて甕棺とする。棺体は、成人の体を納めるのに十分な大きさから、小児用あるいは骨壺とも受け取れる大きさまでサイズにかなりばらつきがある。ベトナム全体における甕棺の型式分類については、表2を参考にされたい（鈴木 2012）。

筆者の型式分類では、ゴーマーヴォイ遺跡の甕棺は、形態4に分類できる甕棺が大半を占めている。山形やベトナム考古学界ではこの形態を「卵形甕棺」と呼称しているが、ここでは有肩甕棺の形態4と呼ぶことにする。また、ベトナムの甕棺に用いられる土製の蓋は、三角錐の頂部を切り取り平らにしたような形態をしており、一般的には帽子形（hình nón cụt）と呼ばれるものが多く使われている。

副葬土器に関しては筆者も分類を試み、主な器種として広口壺、台付広口壺、鉢、浅鉢、台付浅鉢を確認できた。また、特殊な器種としてランプ形土器（đèn）が存在する²⁾。実際にランプとして用いられていた証拠はないのだが、今回は便宜的にランプ形土器という呼称を用いることとする。

2-4. 基準墓群資料の比較

99GMVH5M3号墓³⁾資料（図5-1）と99GMVH4M1号墓資料（図5-2）は、本遺跡の中でも副葬土器の量が豊富である。先述の分析作業の前に、これらの資料についても詳細な分析を行う。

まず、器種構成を見ると両者とも広口壺、台付広口壺、台付浅鉢がそろっていることがわかる（図5-1-3～12、16～18及び図5-2-3～8）。数量面では圧倒的に99GMVH5M3号墓（図5-1）の方が多いが、99GMVH4M1号墓には、鉄器と金製ビーズが含まれている（図5-2-11～14）。また、文様の点では99GMVH5M3号墓（図5-1）の方が彩色が多く、99GMVH4M1号墓（図5-2）では刻線文あるいは押印文の文様が主体となる。しかし、壺の胴部、中位よりやや上

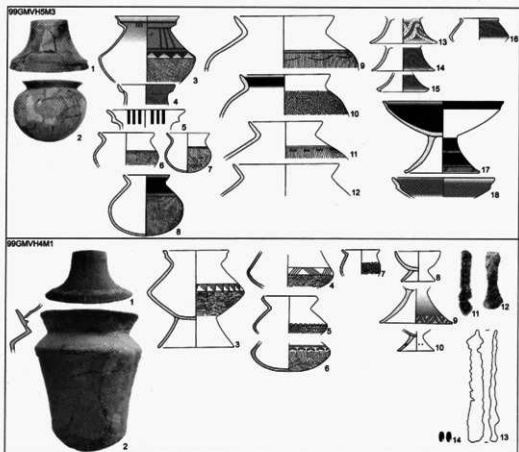


図5 各墓の遺物組成

1. 99GMVH5M3号墓(上段) 2. 99GMVH4M1号墓(下段)

から底部にかけては縄席文が施される点は両者に共通する。この縄席文はおそらく成形時の調整痕であろう。そして、何より注目すべきは甕棺の蓋である。両者とも帽子形を呈す点は共通するが、口縁部(裾部)の型式が異なる。99GMVH5M3号墓(図5-1-1)の場合、蓋の口縁部は直立し段を作っているが、99GMVH4M1(図5-2-1)号墓の蓋の口縁部は段を持つものの、なだらかなり裾が広がる型式を呈す。この違いは型式的な差異と言っても良いのだろうか。その答えは1-3で触れた山形の研究に見出せる。

トゥーボン川流域の支流、河口から70kmの左岸にビンイエン Binh Yên 遺跡が位置している。ビンイエン遺跡は、1998年にブイ・チャー・ホアン Bùi Chí Hoàng (ホーチミン市南部社会科学院考古学センター)、山形眞理子、クアンナム省博物館により発掘された。発掘坑は2つ開けられ、36㎡のH1発掘坑から甕棺墓が1基、35㎡のH2発掘坑から甕棺墓が8基出土した。

先行研究でも紹介したとおり、報告者の山形はH1発掘坑の甕棺墓(図3-1)をI段階、H2

発掘坑の甕棺墓（図3-2）をⅡ段階として、Ⅰ段階がⅡ段階に先行するという見解を述べている。山形が指摘したのは副葬品構成に基づく時間差であるが、再度各段階の副葬品についてその特徴を把握しておきたい。

Ⅰ段階の甕棺（図3-1）は、肩部に稜を持つ卵形あるいは長胴形を呈し、蓋は無文または彩色を施され、帽子形を呈す。土器は多様な器形・文様を持つという。一方、新しい方のⅡ段階（図3-2）において、甕棺は長胴形を呈し、蓋は帽子形を呈し、刻線文または彩色が施される。土器は器種が減少し、施文は縄文あるいは無文が中心を占めるという。また、鍋（Nôi）がサーフィン文化の土器の中心を占める器種であり、鍋に施されるものが中心的な文様である、という見解も述べられている（山形 2012）。

山形の論に関して、筆者が目したいのは甕棺の蓋の型的差異である。Ⅰ段階の蓋（図6-1）は、口縁部が垂直に立ち上がり段を生じている。一方Ⅱ段階の蓋（図6-2）は、口縁部がなだらかに広がるだけで、段が全くない、あるいはわずかに残るだけである。つまり、Ⅰ段階がⅡ段階に先行するという見解を肯定的にとらえれば、甕棺の蓋の口縁部は段を持つ型式から、段を持たない型式へと変化していくという方向性を指摘することができる。

改めてゴーマーヴォイ遺跡の99GMVH5M3号墓の蓋（図6-3）と99GMVH4M1号墓の蓋（図6-4）を見てみると、前者はビンイエン遺跡におけるⅠ段階の蓋に近い型式であると言える。一方、後者はビンイエン遺跡Ⅱ段階の蓋ほど段が退化してはいないが、Ⅰ段階よりもⅡ段階に近い型式であると言えよう。従って、99GMVH4M1号墓の蓋（図6-4）は、ビンイエン遺跡におけるⅠ段階とⅡ段階の間の型式として認識できよう。

蓋以外でも型的差異が観察できる。例えば、胴部が屈曲する広口壺が両墓にみられるが、文様が大きく異なる。99GMVH5M3号墓の胴部屈曲壺（図5-1-3）には赤と黒の彩色による文様が表現されている。一方99GMVH4M1号墓の台付の広口壺（図5-2-3）は刻線文により文様が表現されている。さらに、口縁部も前者は強い屈曲を呈すが、後者の屈曲は弱くなる。蓋と同じような型式変化と言える。

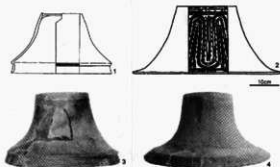


図6 蓋の形式的差異

1. ビンイエン遺跡Ⅰ段階 2. ビンイエン遺跡Ⅱ段階 3. 99GMVH5M3号墓 4. 99GMVH4M1号墓

文様にさらに着目すれば、99GMVH5M3号墓には、上述の彩色文のほかに、土器の胴部の無文部と縄文部分の境界に2本の沈線を引き、その下に短い刻線を引く刻線文(図5-1-9, 11), そして連結S字文と三角文を組み合わせる文様(図5-1-13-16)が見られる。一方、99GMVH4M1号墓には上述の刻線による鋸歯文のほかに、多重線による鋸歯文(図5-2-4), 鋸歯文を上下に組み合わせ間を斜線で充填するという複雑化した鋸歯文(図5-2-9), 貝殻押圧文(図5-2-6), 爪形文(図5-2-5)が見られる。文様に関しても明確な違いが見られる。

したがって、本論では99GMVH5M3号墓と99GMVH4M1号墓を別型式のアセンブリッジとして仮定し、前者をGMV-I型式、後者をGMV-II型式と便宜的に呼称し、分析作業を進めていくこととする。

2-5. GMV-I型式のアセンブリッジ(図7)

前項目では蓋に着目することで型式差の認識を行えることを指摘した。しかし、99GMVH5M3号墓の蓋(図5-1-1)に類似した蓋は他に報告されていない。筆者は土器資料

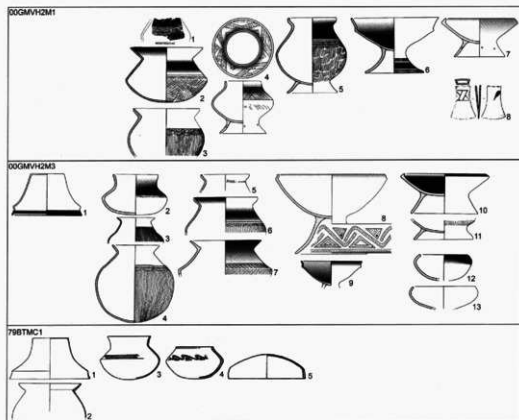


図7 99GMVH5M3号墓と共通点を持つ墓の遺物
1. 00GMVH2M1(上段) 2. 00GMVH2M3(中段) 3. 79BTMC1(下段)

の補完のための資料調査を行ったのだが、それらしき資料は補完できなかった。そこで、蓋以外の特徴的な資料に着目することにした。まず、脚部に黒の彩色と2本の文様帯を持ち、浅鉢部分にも黒の彩色が施される台付き浅鉢（図5-1-17）と同じ特徴を持った土器を追う。なお、便宜的にこの型式の台付浅鉢をベトナム語 *Bát Bông* の頭文字をとってBB（1）と呼称する。

00GMVH2M1号墓（図7-1）には99GMVH5M3号墓のBB（1）（図5-1-17）と同じ特徴を持った台付き浅鉢（図7-1-6）がある。脚部には黒の彩色と2本の文様帯が、浅鉢部分にも黒の彩色が施されている。BB（1）と類似していると判断してよいだろう。他にも00GMVH2M1号墓には胴部が屈曲せず、口縁部が袋状気味になる台付壺（図7-1-5）や、口縁部がわずかにくの字状になり、外面に稜が生じる台付き浅鉢（図7-1-7）が共存している。この台付浅鉢は以下BB（2）と呼称する。前者の施文に関しては口縁部下から胴部の縄席文部分の間にある無文部が黒色で彩色されており、また胴部の縄席文部分の上位には刻線文が施される。これは99GMVH5M3号墓に見られる文様と共通する。この台付袋状口縁壺と類似するもの（図7-2-6）が00GMVH2M3号墓にも存在する。00GMVH2M3号墓にはBB（2）（図7-2-10）、GMV-I型式の蓋（図7-2-1）も共存している。また、内傾する口縁部外面を赤く彩色された台付浅鉢（図7-2-8）の台部には、連結S字文と三角文を組み合わせた文様が施されている。これも、GMV-I式に見られる文様である。

ところで、00GMVH2M3号墓から出ているGMV-I型式の蓋に共存して、口縁部がわずかに外反しながら垂直に立ち上がる口縁を持つ胴部屈曲広口壺（図7-2-2）がある。クエンナム省南域、省都のタムキー *Tâm Kỳ* 市近郊のパウチャム遺跡でもGMV-I式の蓋と垂直口縁胴部屈曲広口壺の共存関係が見られる（図7-3-1、2）。どうやらこの垂直口縁胴部屈曲広口壺もGMV-I式に含めることができそうである。さらに、連結S字文と三角文を組み合わせた文様と似たものが広口壺（図7-3-4）の胴部上位に施されている。他の遺跡でもGMV-I型式の特徴が共存するようである。

2-6. GMV-II式のアセンブリッジ（図8）

99GMVH4M1号墓の土器において着目したいのが台部の裾につく鋸歯状文（図5-2-9）である。この鋸歯状文は、上下互い違いの鋸歯文を2本の沈線で描き、その鋸歯文の間と個々の鋸歯文の内側を斜線刻線文で充填している。そして、2本の沈線で表現された上下の鋸歯文は、無文部分に彩色が施されている。この文様は、99GMVH4M1号墓以外に、99GMVH3M6号墓（図8-1）、99GMVH3M2号墓（図8-2）の土器に確認できる。前者においてはいわゆるランプ型土器の皿部に施されており（図8-1-5）、後者においては、彩色ではなく斜線充填ではあるが、2段に鋸歯文を組み合わせた文様が、同じくランプ型土器の脚部に施されている（図8-2-8）。一方、99GMVH3M3号墓にも口縁部内面に鋸歯文を持つ土器（図8-3-12）が存在するが、この場合はGMV-II式における斜線充填鋸歯文でもより単純な構成のもの（図5-2-3）

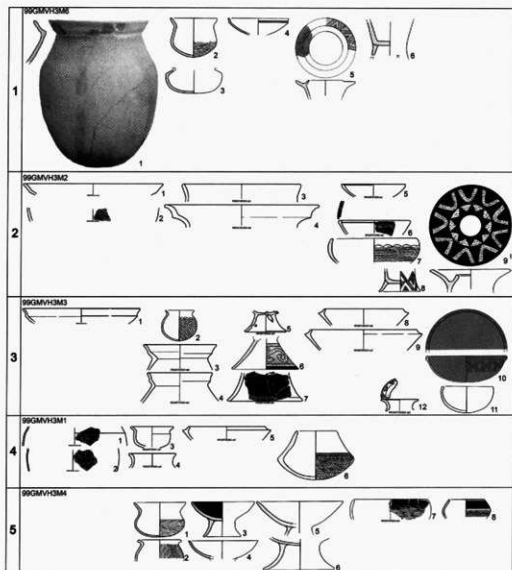


図8 99GMVH4M1号墓と共通点を持つ墓の遺物

に類似している。

一方、99GMVH3M3号墓の他の伴土器の中で、口縁部が特徴的な二つの浅鉢が見つかった（図8-3-8、9）。口縁部が内側に折れ外面はBB（2）のように外面に稜をなすが、屈曲部から口唇部が凹み、屈曲部分が突帯状になっている。一見、蓋受けを持つ須恵器の坏の口縁部分にも似ているが、今のところこの型式の浅鉢に伴う蓋は確認されていない。したがって、ここでは受け口状口縁浅鉢と呼称する。この受け口状口縁浅鉢は、99GMVH3M1号墓でも見られる（図8-4-5）。もう一つ特徴的なのが、全面に黒の彩色が施された貝殻押圧文を持つ浅鉢（図8-

3-10)である。内外面共に黒く塗られる土器は数量的には多くないものの、必ず貝殻押圧文を口縁・口唇部に持つという特徴がある。

貝殻押圧文という観点から土器を見れば、複雑な鋸歯状文を持つランプ形土器の台部が出土している99GMVH3M2号墓にも貝殻文を持つ浅鉢（図8-2-7）がある。この個体には、黒の彩色は施されていないが、胴部口縁部下の無文帯と、無文帯以下の縄文文との境界に連弧文状に貝殻押圧文が施されている。99GMVH3M4号墓にも、99GMVH3M2と類似した土器（図8-5-7）がみられる。

2-7. トゥーボン川流域における甕棺墓遺跡間での比較（図9）

99GMVH4M1に見られる2種類の鋸歯文だが、タムミーTam Mỹ遺跡76TMM7号墓の甕棺の蓋（図9-1）の口縁部に、類似した鋸歯文が見られる。また、資料が古く同伴関係が不明であるが、同じくタムミー遺跡から、皿部に鋸歯門を持つランプ型土器（図9-2）が出土している。また、トゥーボン川の河口に位置するハウサーI Hàu Xá I遺跡出土の甕棺の蓋（図9-3）の頂部付近に廻る文様は、タムミー遺跡76TMM7号墓の蓋（図9-1）の頂部付近の文様と類似している。また、ハウサーI遺跡からは、GMV-II式の鋸歯文と類似した文様を持つ土器が出土した。例えば、90HXIM9号墓から出土した土器90HXIM9-2（図9-4）には、斜線を充填した鋸歯文が上下に向かい合い格子状の文様を描いている。さらに90HXIM9-5（図9-5）には、二重線で表現された鋸歯文の間を斜線で充填するという文様が施されている。また、90HXIM10-1（図9-6）の文様は、鋸歯文の周囲を沈線で囲う表現がなされている点は特殊であるが、斜線充填された鋸歯文を用いている点はGMV-II式と共通する。

他にも、ビンイエン遺跡より約10km、トゥーボン川右岸に位置するタックビックThạch Bịch遺跡M1号墓から、口縁部の段がなだらかな甕棺の蓋と貝殻押圧文を台部に持つ台付浅鉢（図9-7）が出土した（Yamagata 2006）。要素による比較を行うと、トゥーボン川流域内でかなりの共通性が見出せるようである。

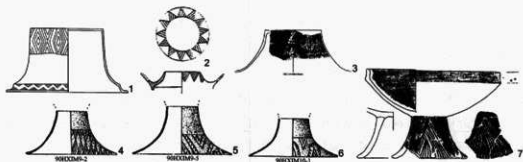


図9 トゥーボン川流域甕棺墓遺跡出土陶片土器
1, 2: タムミー遺跡 3-6: ハウサーI遺跡 7: タックビック遺跡

3. 小結：仮説の検証

3-1. 抽出要素の相関関係

99GMVH5M3号墓をGMV-I式, 99GMVH4M1号墓をGMV-II式として各墓の土器と比較

表3 仮定型式を構成する各要素(器種)

要素	例	説明
蓋-i		帽子形を呈す。口縁部が垂直に立ち上がり段を強く生じる
蓋-ii		帽子形を呈す。口縁部は垂直には立ち上がらず横に開き、弱い段を生じる。
BB(1)		台付浅鉢。口縁部が屈曲し段を生じる。台部には平行にひかれた2本の沈線の間を斜線で充填し、その上に一定間隔で逆向きの斜線を1本ずつ描くという文様帯が上下に2段入る。
BB(2)		台付浅鉢。口縁部が内側に向かって短く屈曲し、外面に段を生じる。台は浅鉢部と同程度の高さでBB(1)に比べ低い。
受け口状口縁浅鉢		浅鉢。口縁部が内側に強く屈曲し、屈曲部分がタガ状になっている。

表4 仮定型式を構成する各要素(文様)

要素	例	説明
文様①		彩色による文様表現。
文様②		主に(台付)蓋・(台付)浅鉢に見られる文様。無文部分と縄文部分の境界に沈線をも1〜2本描き、その下の縄文部分に短い横位の沈線や弧を描く文様。
文様③		連結S字文と三角文の組み合わせによる文様。
文様④		刻線による劔歯文。斜線充填がみられる。
文様⑤		多重刻線による劔歯文。
文様⑥		上下互い違いの劔歯文を2本の沈線で描き、その劔歯文の間と個々の劔歯文の内側を斜線刻線文で充填する文様。
文様⑦		爪形文。
文様⑧		貝殻押印文。

を行い、仮定型式を構成する要素の抽出を行った。その結果得られた要素を表3・表4にまとめた。

分析に際し99GMVH5M3号墓に見られる特徴と、99GMVH4M1号墓に見られる特徴をそれぞれGMV-I式とGMV-II式と仮定したが、抽出された要素の相互関係については検討できていない。本論で設定した仮定型式を構成する要素が真に各型式の特徴を示すのであれば、GMV-I式とGMV-II式の各要素は各墓において共伴しないといえる。この仮説を検証するために、各要素がどのような共伴関係にあるかを検討した。表5がその結果である。

この表からまず読み取れるのは、文様の共伴関係が2つのグループに分かれる点である。文様①・②・③は互いに共伴する事例があるが、文様④・⑤・⑥・⑦・⑧とは共伴しない。またその逆に、文様④・⑤・⑥・⑦・⑧も互いに共伴する事例がある。

文様以外の要素と文様との共伴関係にも、偏向がみられる。BB(1)は7個体が確認できるが、8種の文様とは共伴しない例を除き、文様①・②・③とのみ共伴す

表5 各墓葬における要素の組み合わせ

墓番号	甕棺	蓋	BB(1)	BB(2)	受け口 状口縁 浅鉢	文様①	文様②	文様③	文様④	文様⑤	文様⑥	文様⑦	文様⑧
99GMVH2M1	(形態4)		3				1						
99GMVH5M2	形態8					1	1						
99GMVH5cg3							1	1					
00GMVH2M2	形態3	台付浅鉢					1						
00GMVH2cg4		i					1						
99GMVH5Md		i	1			1	2	4					
00GMVH2Md			1	1			3						
00GMVH2M3		i		1			3	1					
00GMVH3M2	形態4	i	2										
99GMVH3M5	形態4				(1)			1					
99GMVH2cg1				(1)			1			2			
99GMVH3M1	形態4				1								1
99GMVH3M2	形態4										1		1
99GMVH3M3	形態4				2				1				1
99GMVH3M4	形態4												2
99GMVH3M6	形態4										1		
99GMVH4M1	形態6	ii							1	1	1	1	1
99GMVH4M2	形態4	ii											
99GMVH5M1	形態8												
00GMVH3M1	形態1												
00GMVH3M3	形態4												
99GMVH2cg2		ii											
99GMVH1Md													
99GMVH2cg3													
99GMVH3M7d													
00GMVH3cg4													

る。BB (2) は、文様②・③との共伴を確認できる。一方、受け口状口縁浅鉢は文様③・④・⑧と共伴する。

そして、甕棺の蓋に関して、蓋-iは文様①・②・③と共伴し、蓋-iiは、99GMVH4M1の1例のみではあるが、文様④・⑤・⑥・⑦・⑧と共伴する。しかし、甕棺に関しては今回の分析で何らかの傾向を見出すことはできなかった。

4. 考察

分析結果から見出すことができた以上の傾向をまとめると、抽出された各要素は次の2つのグループに分けられることができる。

表6 トゥーボン川流域甕棺墓遺跡で確認される型式

遺跡名 段階	ゴーマーヴォイ	パウチャム	タムミー	ハウサー I	ビンイエン H1 発掘坑	タックビック
GMV-I 式段階	●	●			●	
GMV-II 式段階	●		●	●		●

1：文様①・②・③—BB (1)・BB (2) —蓋-i

2：文様④・⑤・⑥・⑦・⑧—受け口状口縁浅鉢—蓋-ii

そして、上記2つのグループは、分析に際し仮設定したGMV-I式と、GMV-II式に、それぞれ対応するものである。以上より、ゴーマーヴォイ遺跡には少なくとも2型式が存在するということが明らかになった。

また、ゴーマーヴォイ遺跡とトゥーボン川流域の甕棺墓遺跡の時代的關係については以下のようにまとめられる(表6)。タムミー遺跡で斜線充填鋸歯文が甕棺の蓋の口縁部(図9-1)やランプ型土器の皿部(図9-2)に見られ、ハウサー I 遺跡ではタムミー遺跡の甕棺の蓋(図9-1)と共通する文様を持つ蓋(図9-3)や、鋸歯文を持つ土器の台部(図9-4~6)が見られることは先に述べたとおりである。これらの要素は、GMV-II式の特徴であると言える。また、分析のところで触れたとおり、ビンイエン遺跡H1発掘坑、パウチャム遺跡ではGMV-I式の要素が確認できる。したがって、ゴーマーヴォイ遺跡におけるGMV-I式、GMV-II式といった型式は、遺跡という限られた地域内、あるいは遺跡を形成した限られた集団によって生み出された型式ではないと考えられる。また、ビンイエン遺跡H1発掘坑、パウチャム遺跡はゴーマーヴォイ遺跡におけるGMV-I式の時期と、そしてタムミー遺跡、ハウサー I 遺跡、タックビック遺跡はGMV-II式の時期を各遺跡の形成時期の中に含んでいる。ただし、それぞれの遺跡が、GMV-I、II式だけでなく、その前後を含んでいるかについては現時点で明言できない。

甕棺に関しては、今回の分析を通して型式変化を認識することができなかった。しかし、GMV-II式に属す、99GMVH4M1号墓、99GMVH3M6号墓と、トゥーボン川流域の遺跡を比べると、ある仮説を立てられる(図10)。まず、タックビック遺跡の甕棺(図10-2)はゴーマーヴォイの形態4(図10-1)より張り出しが弱くなっている。さらに、ハウサー I 遺跡で出土している形態9の甕棺(図10-3)は完全な寸胴ではなく、やや膨らみを残して長胴化している。このように、形態4から形態9への型式的変化が確認できる。また、肩の張り出しが弱くなり、縦に伸びるように変化するという山形の考えに同意できる。一方、形態6の甕棺はゴーマーヴォイ遺跡99GMVH4M1号墓(図10-4)、タムミー遺跡(図10-5)、ハウサー I 遺跡(図10-6)で確認できる。こちらでも、口唇部から稜を持つ肩までの長さが器高に対して短くなるという型式変化がみられる。そして、ハウサー I 遺跡では、形態4から変化したと考えられる形態9の甕棺(図10-3)と、形態6の甕棺(図10-6)が確認される。型式変化はしているものの、形態4と形態6に繋がりを持つこれらの甕棺が1遺跡内で見られるということはGMV-II式には形

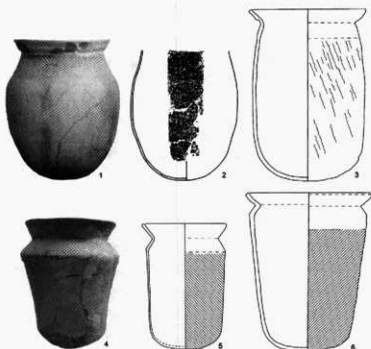


図10 トゥーボン川流域甕棺墓遺跡出土甕棺

1, 4: ゴーマーヴォイ遺跡 2: タックピック遺跡 5: タムミー遺跡 3, 6: ハウサーI遺跡

態4と形態6という2つの形態が同時に存在していた可能性があり、その形態差は時期差ではないと考えられる。つまり、甕棺の形態には2系統が存在していたと推測できる。

ところで、山形はビンイエン遺跡において2段階区分をしており、I段階にゴーマーヴォイ遺跡が属すると述べている。確かに、ゴーマーヴォイ遺跡におけるGMV-I式と、ビンイエン遺跡においてI段階と比定されたH1発掘坑の甕棺墓は、同じ型式であると言える。しかし、本論ではゴーマーヴォイ遺跡が2段階に分けられることを証明した。したがって、山形の2段階時期区分のI段階は、さらに細分化されると言える。

また、1遺跡内で2型式が存在するということの意味に関して、筆者は以下のように考えている。ゴーマーヴォイ遺跡が形成されたのは、1型式でもって示されるような一時期のことではなく、ある一定期間の間、遺跡が維持・形成されたことを示しているのではないだろうか。そう考えた場合、墓壇の切りあい関係がほとんどないという状況は一見奇妙に思える。しかしそれは、古い型式を含む墓が、次の型式を含む墓が作られる際にまだ存在し認識されているという状況を示すと言えよう。また、そういった墓の位置に関する認識の継続は、ゴーマーヴォイ遺跡を形成した人々によって墓が維持・管理されていたことを間接的に示していると考えられる。

5. おわりに

トゥーボン川流域において、GMV-I式とGMV-II式という2型式の存在を明らかにし、ゴーマーヴォイ遺跡と他の甕棺墓遺跡間が並行する時期があることを提示した。しかし、あくまで一時期の並行の指摘にとどまっており、各遺跡の存続期間にどれほどのずれがあるかについては未だ不明である。また、山形が提示したII段階への移行について、型式学的側面から遺物の変遷の説明ができていない。これらの問題点に関しては、今回取り上げたゴーマーヴォイ遺跡以外の各遺跡について現地博物館にて資料調査を行い、コンテキストの確認を行うことで新たな成果が得られると考えている。また、筆者の観察では、フエのコンラン (Cồn Ràng) 遺跡、クワンガイ (Quảng Ngãi) 省ドンクオム (Đồng Cù) 遺跡と、トゥーボン川流域の甕棺墓資料を比較すると、共通点や型式学的変遷が伺える資料がある。コンラン遺跡とドンクオム遺跡の資料は、コンテキストも良好で資料数も豊富なため、資料の補完調査を行えばこちらも遺跡内で型式的变化を確認することが可能であると考えている。甕棺墓の広域編年作成のために、以上の作業を進めていく予定である。

謝辞

本論文の執筆に当たり、指導教官の後藤直先生には大変多くのご教授を賜りました。また資料調査に際しては山形真理子先生から手厚いご指導を頂き、ベトナムでもブイ・チー・ホアン Bùi Chí Hoàng 博士、グエン・キム・ズン Nguyễn Kim Dung 博士、ラム・ティ・ミー・ズン Lâm Thị Mỹ Dung 先生、石井綾子氏、グエン・ホアン・バック・リン Nguyễn Hoàng Bách Linh 氏、ズイスエン県サーフィン・チャンバ博物館 Bảo tàng Sa Huỳnh và Champa Duy Xuyên、ハノイ国家大学附属人類学博物館 Bảo tàng Nhân Họcのご協力を頂きました。また、西村昌也先生からは叱咤激励と親身なアドバイスを頂戴しました。多くの方々に大変お世話になりましたことを、心より感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS特別研究員奨励費25・4549の助成を受けたものです。

非常に残念なことに、本論文執筆中の2013年6月9日に西村昌也先生がハノイにて急逝されました。私に大きな影響を与え、導いて下さった恩師への哀悼の意を込め、本論文を捧げます。

註

- (1) 山形真理子氏のご教授による。
- (2) ランプ型土器に関して石井は「口縁部の外側、胴部上半に円盤状の皿部を持ち、胴部はわずかにくびれ、胴部の下部には台が付くもの(石井2012)」と説明している。本論でもこの説明に則ってランプ形土器の認識を行った。
- (3) 99GMVH5M3号墓とはそれぞれ、99=発掘年1999年、GMV=Gò Mã Vôi, H5=Hố (発掘坑)の頭文字+番号5・M3=Mộ (墓)の頭文字+番号3、を省略したものである。その他の遺跡の墓識別番号もこの法則に従っている。

参考文献

- 石井彩子 2012 「サーフィン文化の時間的・空間的枠組みの再考—副葬土器を中心に—」 2011年度早稲田大学文学研究科提出修士論文。（未刊行）
- 今村啓爾 1991 「東南アジア先史文化における海洋性—とくにサーフィン系文化について—」『東南アジア考古学会会報』11：68-69 東南アジア考古学会。
- グエン・チユ（Nguyễn Chiêu） 2010 「ベトナム中部の初期金属器時代—サーフィン文化の概要—」『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』14-29 高志書院。
- 鈴木朋美 2012 「ベトナム中部出土墓棺の型式学的研究」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』57：97-115 早稲田大学文学研究科。
- 西村昌也 2012 「ベトナム形成史における“南”からの視点」『周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」—歴史学・考古学研究からの視座—』105-141 関西大学文化交渉学教育研究拠点。
- 山形眞理子 2007 「ベトナムの墓棺葬—その起源に関する予察—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』52：97-115 早稲田大学文学研究科。
- 山形眞理子 2009a 「東南アジアにおける人間集団の拡散仮説とサーフィン文化」新川登亀男・高橋龍三郎（編）『アジア研究機構叢書 人文学篇 東アジアの歴史・民族・考古』320-354 雄山閣。
- Bellwood, P. 1997 *Prehistory of Indo-Malaysian Archipelago (Revised edition)*. Honolulu, University of Hawaii Press.
- Bùi Chí Hoàng, Yamagata Mariko 2005 Địa điểm khảo cổ học Bàu Trám (Núi Thành-Quảng Nam). *Khảo Cổ Học*, 2005(1): 27-49.
- Bùi Văn Liêm 2005 Mộ táng Lung Leng. *Khảo Cổ Học*, 2005(5): 15-26.
- Chữ Văn Tấn, Đào Linh Côn 1978. Khai quật di tích Long Thạnh. *Những Phát Hiện Khảo Cổ Học Ở Miền Nam*, 196-224. Thành Phố Hồ Chí Minh, Viện Khoa Học Xã Hội Tại Thành Phố Hồ Chí Minh.
- Hà Văn Tấn 1983
- Lâm Thị Mỹ Dung, Nguyễn Chiêu, Hoàng Anh Tuấn 2001 Khai quật Gò Dừa năm 1999. *Khảo Cổ Học*, 2001(1): 68-80.
- Ngô Sĩ Hồng, Trần Quý Thịnh 1991 Khu mộ chum Hậu Xá, Hội An(Quảng Nam-Đà Nẵng) và nhận thức mới về văn hóa Sa Huỳnh. *Khảo Cổ Học*, 1991(3): 64-75.
- Nguyễn Khắc Sứ 2005 Di chỉ Lung Leng, nhận thức bước đầu. *Khảo Cổ Học*, 2005(5): 3-14.
- Parmentier, H. 1924 Notes d'archéologie indochinoise: VII. Dépôts de jarres à Sa-huynh (Quảng-ngãi, Annam). *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, 24: 325-343. École française d'Extrême-Orient.
- Reinecke, A., Nguyen Chieu, Lam Thi My Dung 2002 *Gò Ma Voi - Neue Entdeckungen zur Sa-Huynh-Kultur (Những phát hiện mới về văn hóa Sa Huỳnh)*. Linden soft.
- Solheim, W. G. (ed.) 1961 Sa-huynh Pottery Relationships in Southeast Asia. *Asian Perspectives* III-1.2 Winter Issue of 1959.
- Trịnh Căn, Phạm Văn Kinh 1977 Khai quật khu mộ chum Tam Mỹ (Quảng Nam - Đà Nẵng). *Khảo Cổ Học*, 1977(4): 49-57.
- Vũ Quốc Hiến 2009 Tổng quan về văn hoá Sa Huỳnh Nhân 1 thế kỷ phát hiện và nghiên cứu. *Cổ vật Tinh Hoa*, 31: 4-25. Hội Khoa học Lịch sử Việt Nam.
- Vũ Quốc Hiến, Trịnh Căn, Hồ Tấn Tuấn 1993 Di chỉ Bàu Trám (Quảng Nam - Đà Nẵng). *Viện Bảo tàng Lịch Sử Việt Nam Thông báo khoa học*, 1993: 25-58. Viện Bảo tàng Lịch sử Việt Nam.
- Yamagata Mariko 2006 Chapter17: Inland Sa Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in Central Vietnam.

Uncovering Southeast Asia's Past: Selected Papers from the 10th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, 168-183. NUS Press.

Yamagata, M. 2007 The early history of Lin-I viewed from archaeology. *Acta Asiatica*, 92:1-30.

(早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻考古学コース博士課程

日本学術振興会特別研究員DC ㊦162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学考古学研究室)